

中国古代史研究の

最前線

佐藤信弥

出土文献と
最新研究で、

中国古代史
はもっと面白くなる!

『封神演義』から『キングダム』まで、
気鋭の研究者が2000年前の歴史の実像に迫る——。

中国古代史研究の最前線

佐藤信弥

星海社

123



SEIKAISHA
SHINSHO

甲骨は龍骨りゅうつこつだったか

中国古代の「幻の王朝」発見のきっかけは漢方薬だったと聞いたらどう思われるだろうか。突拍子のない話に聞こえるかもしれないが、殷王朝いんに関してこれまでそういう話が語られてきた。

事のおこりは清朝末期、一種の名譽職である国子監祭酒こくし かんさいししゅの地位にあつた王懿榮おうい えいには瘡おこり（マラリ）の持病があつた。その治療のために北京の達仁堂たつじんどうという薬局から「龍骨」と呼ばれる漢方薬を買い求めたところ、その「龍骨」に原始的な文字らしきものが刻まれているのに気付き、食客である劉鶚りゅうがくという学者とともに「龍骨」を買い集め、研究に励むようになった。その「龍骨」の正体は殷墟いんきょから得られた甲骨を砕いたものだったのである。

甲骨文発見の経緯としてよく知られるエピソードである。近代中国において夏王朝かや殷王朝は実在が証明されていない「幻の王朝」であつたこと、甲骨文の発見が殷王朝の実在の証明に

つながったことと併せて、学校の歴史の授業で耳にしたという読者も多いだろう。

この甲骨文の発見は一般に一八九九年、当時の年号で光緒二十五年のこととされる。その翌年に義和団事件が発生し、その鎮圧のために八カ国連合軍が入城すると、王懿榮は国難に殉ずるといふことで自害した。甲骨のコレクションとその研究は劉鶚に引き継がれ、一九〇三年に甲骨文の拓本の図録『鉄雲蔵亀』を出版し（鉄雲は劉鶚の字）、甲骨文の存在が中国で広く知られるようになった。

しかし王懿榮が甲骨文を見出した経緯は、実際は少し異なるようである。『鉄雲蔵亀』の劉鶚による自序には、河南省で掘り出された甲骨が范という者の手に渡り、彼が北京に甲骨を持ち込んだところ、王懿榮が狂喜してこれを高値で買い求めたとある。この范というのは山東省の骨董商であった范維卿という人物とされる。これによると、王懿榮は瘡の治療のための「龍骨」としてではなく、最初から骨董品として甲骨を買い求めたということになる。

甲骨文の発見以前より、古い時代の漢字である古文字の存在は既に認識されていた。後漢の時代に許慎が編纂した字書『説文解字』には、秦の時代に制定されたとされる小篆、戦国期の文字とされる籀文や古文といった書体が掲載されているし、殷周時代の金文（青銅器の銘文）の研究は宋代より行われていた。金文や石刻を研究する金石学の素養があった王懿榮や劉鶚はも

ちろんのこと、骨董商の范維卿にも甲骨に刻まれているものが文字であると察しがついてもおかしくはない。

王懿榮と劉鶚が瘡の薬として買い求めた「龍骨」から甲骨文を発見したというのは、後になって流布した伝説にすぎないようである。

また一八九九年、王懿榮によって買い取られるより少し前に、范維卿は当時の清朝の有力者であった端方たんほうに甲骨を献上し、甲骨文字一字あたり銀二両五錢で買い取られたとか、更にそれより以前の二八八八年に、同じく范維卿が、後に著名な甲骨学者となる天津の王襄おうじょうのもとに甲骨を持ち込み、その場に居合わせた友人の孟定生もうていせいという人物が「これは古代の簡策かんさく（文献）である」と鑑定したとか、甲骨文の発見に関してはいくつか異説が存在する。

実のところ本書で取り扱う中国古代史は様々な神話や伝説に彩られており、甲骨文の発見の経緯とされてきた話が伝説にすぎないというのは何やら象徴的である。

本書の目的と構成

本書ではこの中国古代史に関する発見や研究の成果を追っていく。

高校の世界史教科書などでは、新たな発見や研究の進展を踏まえたアップデートが充分にで

きていないというのが現状である。たとえば殷王朝よりさかのぼる夏王朝の都城の跡ではないかと注目されている二里头遺跡（↓65ページ）や、その二里头遺跡に代表される二里头文化は、「仰韶文化」「龍山文化」「殷墟」などと並んで教科書にゴシックで記載があってもよさそうなのだが、ゴシックになるどころか記載すらほとんどなされていない。

本書は学校の授業、兵馬俑展などの中国古代史に関係する博物館・美術館の特別展、あるいは小説・コミック・アニメのようなエンタメ作品をきっかけとして中国古代史に興味を持った読者に、基礎的な知識、そして新たな発見や研究の成果を紹介することを目的とする。

ここで本書の構成について紹介しておく、第1章では殷王朝やそれ以前の夏王朝、そして「縦目仮面」など独特な形状の青銅器で知られる三星堆遺跡に関する発見・研究を取り上げる。第2章では殷の次の西周期について取り上げる。殷と周の戦いは藤崎竜によってコミック化された『封神演義』の題材ともなっている。

第3章は春秋期について。宮城谷昌光の小説『重耳』や『晏子』などの題材となった時代である。第4章では戦国期と始皇帝の秦、そして司馬遷の『史記』が書かれた前漢の武帝の頃までの発見や研究を取り上げる。原泰久のコミック『キングダム』は戦国末期の秦を描いた作品である。また始皇帝や項羽と劉邦の戦いを題材とした中国映画・ドラマも多く制作されている。

終章では中国古史研究の最近の動向について取り上げる。

本書で扱う年代は、前二一世紀頃から前一世紀頃までである（後出の年表を参照）。日本の歴史では縄文時代から弥生時代までにあたり、文献による記録が残らない先史時代に属する。

各章の冒頭では、それぞれの時代の概要や教科書的な通説など、読む進めていくうえで頭に入れておいて欲しい基礎知識をまとめてある。各章や節は一定の文脈に沿ってまとめられているが、文中にさきほど出てきたような（↓×ページ）という標識が何箇所も現れる。これはそこで述べている内容に関連する箇所を示したものである。読者の興味に沿って参照して欲しい。

出土文献しゅつど ぶんけんと伝世文献でんせいぶんけん

古代中国を研究するための史料は多種多様であり、しかも現在進行形で新しいものがどんどんと出現している。

まずは、さきほど出てきた甲骨文と金文。このほか細長い竹片に文章などが書かれた竹簡ちくかんや、絹の布に書かれた帛書はくしょなどもある。このような考古学的な発掘や盗掘などによって土の中から出てきた、主に文字による資料を「出土文献」と呼ぶ。これらの出土文献は古文字と総称される漢字の古い形で書かれており、読解には古文字学の知識が必要となる。

現在我々が使っている漢字は、図序-1の「樂」(樂)字の例に示したように、古文字から段階的に発展したものである。我々日本人は現在この「樂」を簡略化した「楽」の字体を用いるが、中国人は更に簡略化した「乐」の字体を用い、台湾人や香港人は昔のままの「樂」の字体を現在でも用いている。

この出土文献というのは中国や台湾で使われている用語である。竹簡に書かれた書物や帛書などはよいとして、甲骨文や金文も文献と比べてしまうには違和感があるかもしれない。これは「伝世文献」と対比するための呼称である。日本では「出土文字資料」とか、図像類も含めて「出土資料」と呼ばれることも多いが、本書では中国や台湾にならって「出土文献」という呼称を用いることにする。

伝世文献とは『史記』や『春秋』しゅんしゅう、左氏伝しでん、『戦国策』せんごくさく、『論語』、『老子』、『孫子』、『山海経』せんがいきょうといった伝統的に受け継がれてきた漢籍を指す。これらはもともと戦国秦漢期において、竹簡や帛書に古文字で書かれていたのが、何度も書写を重ねられ、時代を経るにつれて書写媒体が紙

図序-1 「樂」字の変化



に変化し、当時通行していた書体に書き改められ、現代まで伝えられてきたものである。

これらの文献を歴史学の史料として用いる場合、甲骨文や金文が殷周時代の同時代史料、一次史料として扱われるのに対し、伝世文献については二次的な史料ということになるはずである。しかし実際には、古の王侯の命令や訓戒などをまとめたとされる『尚書』(『書経』)や、西周王朝の官制についてまとめたとされる『周礼』といった文献が一次的な史料として扱われることもままある。こうした手法がはらむ問題については本文中で取り上げていく。

歴史学と考古学

本書では出土文献のほか、殷墟や秦の兵馬俑のような考古学による発掘の成果も取り上げる。伝世文献・出土文献のような文献を史料として過去のことを研究するのが歴史学、その中でも特に文献史学ということになる。これに対して考古学は、遺跡や遺物を通して過去のことを研究する学問である。

歴史学と考古学は独立して存在しているというわけではなく、特に文献による記録が残っている歴史時代を研究の対象とする場合、この二つが密接に結びつくことになる(歴史時代を対象とする考古学を、先史考古学に対して歴史考古学と呼ぶことがある)。

この歴史学と考古学の結びつきについて、歴史学の研究者が発掘の成果を文献の記述を解釈するための補助として用いることもあれば、逆に考古学者が文献の記述を参照して発掘の成果を歴史的な文脈の中に位置づけることもある。「日本考古学の父」とされる濱田耕作はまだ こうさく（青陵せいりょう）は『通論考古学』の中で、考古学は歴史学の一分野であると同時に、歴史学は考古学の一部分でもあり、この両者が助けあい、両方面の研究を総合することで、はじめて人類の過去の研究を全うすることができるとしている。

その歴史学と考古学の関係を示す具体例として、濱田耕作は、志賀島で発見された「漢委奴國王」の金印が、その形式から漢代のものであることが推測される一方で、『後漢書』の記述により金印が後漢の初代光武帝こうぶていの時代のものであることが明らかにされ、当時日本列島と中国との間で往来があった事実が示されるという事例などを挙げている。

その一方で彼はまた、文献の力を借りるのは収集した資料によつて考古学の方面からの研究をひと通りやり終えた後のことであつて、考古学の研究の最中に文献の援助を仰ぐのは、考古学的資料を文献の奴隷や脚注にしてしまうようなものだと釘を刺している。

それでは中国古代史の研究においては、歴史学と考古学との助けあいや双方の研究の総合はどのような形で進められたのだろうか。

中国での古代史の研究史はこの歴史学と考古学との間、そして先に触れた伝世文献の記述と出土文献の記述との関係をどう結んでいくかに腐心した苦闘の歴史である。本書では、研究の最前線に立つ学者たちがその両者の狭間でどのような中国古代史像を描き出してきたかという軌跡を追っていくことにしたい。

本書において出土文献の引用にあたっては、できるだけ通行の字体に改め、かつあらかじめ通仮字（つうかじ普通によって代用される文字）に変換した寛式表記（かんしき）を用いる。引用文中の□は欠字あるいは不明字を、「」はその欠字の部分に補った文句を、……は省略部分があることを示す。

また、本書で引用する出土文献の図録類の略称は以下の通りである。

合集『甲骨文合集』

集成『殷周金文集成』

近出『近出殷周金文集録』

二編『近出殷周金文集録二編』

銘圖『商周青銅器銘文暨圖像集成』

銘圖統『商周青銅器銘文暨圖像集成統編』

目次

序章 3

甲骨は龍骨だったか 3

本書の目的と構成 5

出土文献しゅつどと伝世文献でんせい 7

歴史学と考古学 9

第1章 幻の王朝を求めて 25

第1節 殷墟の発見と甲骨学の発展 28

甲骨文発見の反響 28

殷王の系譜 31

王国維の二重証拠法 35

信古・疑古・積古 36

殷墟発掘 39

甲骨文とは 44

甲骨文の五期区分 47

日本での懷疑論 50

奴隸制をめぐる議論 53

軍隊を率いた王妃 58

歴組卜辞れきそ ぼくじと分組分類ぶんそ 60

第2節

夏王朝の探究 65

夏墟かきよを求めて 65

偃師商城の発見 68

夏商周断代工程 71

王権の成立 73

中国考古学の文献史学指向 76

第3節

古蜀^{こしよく}王国としての三星堆 80

三星堆遺跡の概要 80

縦目仮面と蜀王蚕叢^{さんそう} 81

神樹と十日神話 83

文献の奴隸・脚注としないために 87

共通性から見る 89

「中華文明」の源のひとつとして 91

第2章

西周王朝と青銅器 95

第1節

西周紀年の復原 98

西周青銅器と窖藏 98

金文とは 100

武王克殷の年代 103

夏商周断代工程の西周紀年 106

矛盾を来した年代 108

第2節

非発掘器銘をどう扱うか 113

豳公盨ひんこうしゆへの疑念 113

あの器もこの器も 117

非発掘器は資料として使うな？ 118

晋侯蘇鐘は発掘器か非発掘器か 121

第3節

周は郁郁乎として文なるか？ 124

孔子の理想 124

用鼎制度と礼崩楽壊 125

五等爵制は存在したか 128

第3章 春秋史を「再開発」するには 137

第1節 『左伝』が頼りの春秋史研究 140

春秋史研究の苦境 140

『左伝』とはどのような文献か 141

『左伝』の腑分け 145

『左伝』の魅力に取り憑かれる研究者 148

第2節

東遷は紀元前七七〇年か 151

清華簡『繫年』の出現 151

東遷の認識① 『史記』と『左伝』から 154

東遷の認識② 『竹書紀年』から 157

東遷の認識③ 清華簡『繫年』から 161

東遷の年代 164

真説・夏姫春秋① 『左伝』と『国語』から 168

真説・夏姫春秋② 清華簡『繫年』から 171

第3節

盟誓の現場から 174

盟書の発見 174

侯馬盟書の内容 176

侯馬盟書と范氏はん・中行氏ちゅうこうの乱 179

第4節

春秋諸侯のアイデンティティ 183

曾侯そうこうと天命 183

虚構性が問われなかった始祖伝承 187

呉は太伯・仲雍の子孫か 190

第4章 統一帝国へ 195

第1節

陵墓と死生観の変化 199

文革中の大発見 199

死者の宮殿として 201

兵馬俑に課せられた使命 205

天上世界と地下世界 211

様々な死生観 214

第2節

竹簡インパクト 217

竹簡とは 217

簡帛発見の歴史① 前近代 220

簡帛発見の歴史② 清末・民国期 224

簡帛発見の歴史③ 一九七〇年代 226

簡帛発見の歴史④ 一九八〇年代以後 231

非発掘簡の流通と偽作説 234

「骨董簡」問題 239

第3節

竹簡から何が見えるか 243

甲骨卜辞から卜筮祭禱簡へ 243

庶民のものとなった占い 247

国家の歴史と個人の歴史 251

四面楚歌の裏側で 256

「歴史記憶」の戦争 260

終章 265

嫌われ劉賀の一生 265

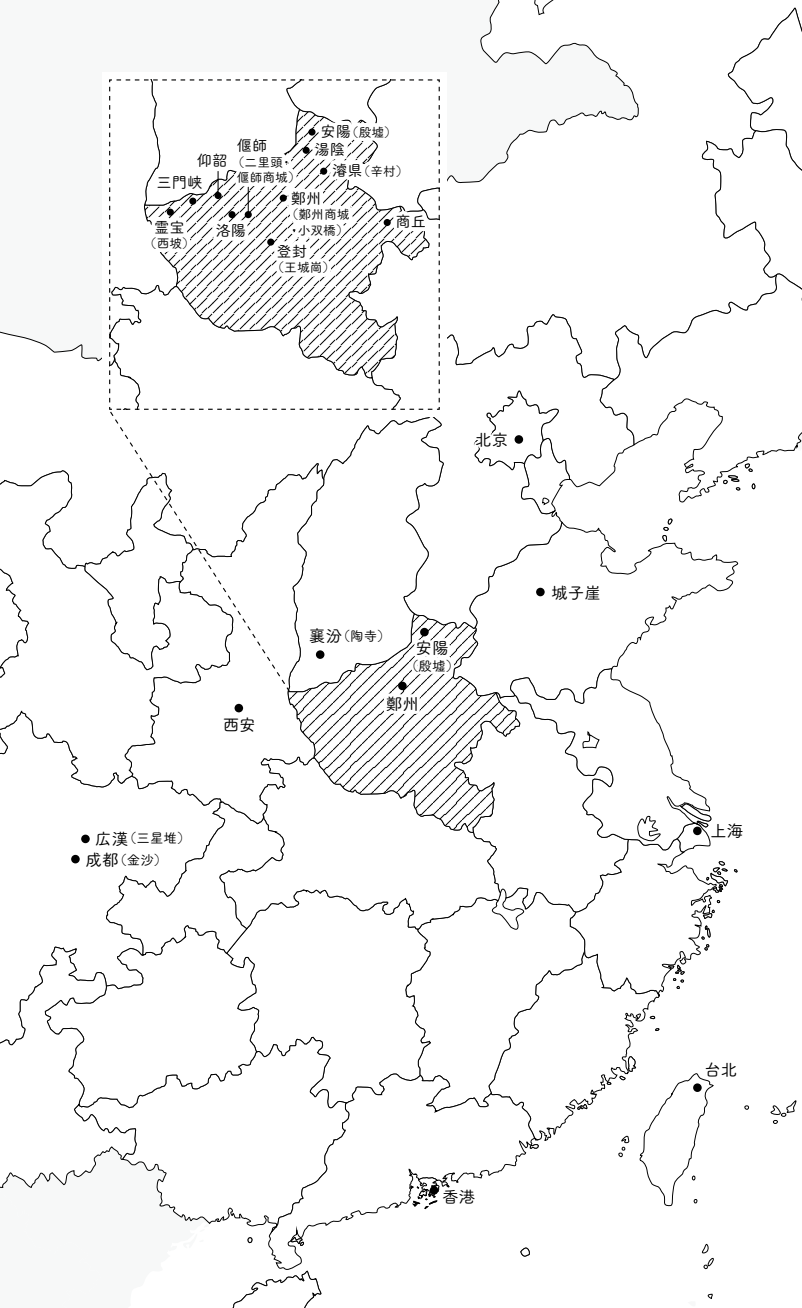
本当に疑古時代を抜け出すべきか？ 269

あとがき
274

主要参考文献
276

年代	時代	事件	対応する章
前2070年頃?	夏	夏王朝が成立。	第1章
前1600年頃?	殷	殷王朝が成立。	
前1300年頃?		殷墟へ遷都。	
前11世紀後半?	西周	牧野の戦いで周が殷を滅ぼし、西周王朝が成立。	第2章
前11世紀後半?		周が殷の遺民による三監の乱を鎮圧する。	
前10世紀後半?		昭王の南征失敗。以後西周王朝は次第に衰退。	
前841年		厲王が追放され、共和の政が開始。	
前771年		西周王朝が滅亡。	第3章
前8世紀中盤	春秋	周の東遷(年代については諸説あり)。	
前651年		覇者・斉の桓公が葵丘の盟を開く。	
前632年		晋の文公が城濮の戦いで楚を破り、覇者となる。	
前506年		呉が柏拳の戦いで楚を破り、楚都の郢を一時占領。	
前497年		晋で范氏・中行氏の乱が勃発。	
前479年	春秋／戦国	孔子が没する。	
前473年		越が呉を滅ぼす。	
前453年	戦国	晋で韓・魏・趙の三氏が知氏を滅ぼす。	
前403年		韓・魏・趙が周より諸侯として承認される。	第4章
前359年		秦の孝公が商鞅を登用し、変法を開始。	
前341年		斉の田忌・孫臏が馬陵の戦いで魏の龐涓を破る。	
前260年		秦の白起が長平の戦いで趙を大敗させる。	

前247年		趙政（後の始皇帝）が秦王として即位。	
前221年	秦	秦王政により中国全土統一。始皇帝となる。	
前210年		始皇帝が五度目の巡幸中に没する。	
前209年		陳勝・呉広の乱がおこる。劉邦や項梁・項羽が挙兵。	
前206年		秦が滅亡。劉邦が漢王となる。	
前202年	前漢	劉邦が垓下の戦いで項羽を破り、前漢王朝が成立。	
前195年		劉邦が没し、恵帝が即位。	
前188年		呂后が少帝を擁立し、政権を掌握。	
前180年		呂后が没する。呂氏一族が誅殺され、文帝が即位。	
前154年		呉楚七国の乱がおこる。	
前141年		武帝が即位する。	
前99年		司馬遷が宮刑を受ける。	
前93年？		『史記』がほぼ完成する。	
前91年		巫蠱の乱により戾太子劉拠とその一族が誅殺される。	
前87年		武帝が没し、昭帝が即位する。	
前74年		昭帝が没し、昌邑王劉賀が一時即位するが廃される。	終章
後8年	新	宣帝が即位する。	
23年		王莽が即位して前漢を滅ぼし、新王朝が成立。	
25年	後漢	光武帝が即位し、後漢王朝が成立。	



安陽 (殷墟)
湯陰
濬縣 (辛村)
鄭州 (鄭州商城, 小雙橋)
登封 (王城崗)
洛陽
仰韶 (二里頭, 仰韶商城)
靈寶 (西坡)
三門峽

北京

城子崖

襄汾 (陶寺)

安陽 (殷墟)

鄭州

西安

● 廣漢 (三星堆)
● 成都 (金沙)

上海

台北

香港

第1章

幻の王朝を求めて

● ウルムチ

● 敦煌(莫高窟)



中国の王朝は夏より始まるとされる。伝世文献によると、夏の初代の王の禹は、大洪水の治水などの功績が認められ、時の君主である舜から後継者に指名され、王となった。それまでは血統によらずにすぐれた人物を次の君主とする禪譲によって王位が受け継がれたが、以後は禹の子孫によって王位が継承され、最後の桀王に至る。

中国では河南省偃師市の二里头遺跡がこの夏王朝の都城の跡であるとされている。祭祀儀礼に用いられた爵・鼎といった青銅の礼器や武器も発見されており、この二里头文化の頃から中国の青銅器時代が始まったとされている。ただ、二里头遺跡からは、殷墟の甲骨文に相当するような文字資料が出土していないことから、従来日本の研究者は二里头遺跡を夏王朝の王都と見なすことには消極的であった。

夏王朝を滅ぼしたのは殷である。初代の湯王（成湯）は名臣伊尹の輔佐を得て暴君とされる桀王を征伐し、新たな王朝を建設した。殷王朝の創建は前一六〇〇年頃のこととされる。

夏・殷の時代は、世界史では、エーゲ海でクレタ文明やシュリーマンの発掘によって知られるミケーネ文明が栄えた時期にあたる。

当時の国家の基本単位は、邑と呼ばれる集落であった。大規模な邑ともなると、宮殿区などを取り囲む内城や、更にその外側を取り囲む外郭（外城）を備えた城郭都市の形態をとるものも

あつた。殷は商しやうと呼ばれる大邑が他の邑を服属ふくじくさせる邑制国家いせいこくかとして位置づけられる（そのため殷王朝は商王朝とも呼ばれる）。邑制国家の時代は春秋期頃まで続く。

司馬遷の『史記』によると、殷は後期の王である盤庚ばんこうの時代までに五度都を遷したとされる。河南省安陽市あんやうの殷墟はこれまで盤庚から最後の紂王ちゆうおうまでの都であると考えられてきた。

その殷墟で発見された甲骨文は、盤庚より三代後の武丁ぶてい以後のものであるとされ、その多くが殷王による占卜の記録であつた。殷王は占卜の結果をもとに政治を行い、また歴代の殷王の霊しんなど神霊に対する祭祀が最も重要な任務とされた。そのような祭政一致の国政のあり方は神権政治しんけんせいじと呼ばれたりする。

一方、蜀しよくなどの地方では、こうした中原の王朝とは別に地方王国の存在が語り伝えられた。独特の形状の仮面などで知られる三星堆遺跡さんさんずいや金沙遺跡きんざは、「古蜀王国こしよくおうこく」の存在を示す遺跡として注目されている。

本章では、甲骨文などの出土文献の読解や発掘調査によって、文献上の存在にすぎなかつたこれら「幻の王朝」の存在を確かめようとする動きを見ていくことにしよう。

第1節 殷墟の発見と甲骨学の発展

甲骨文発見の反響

劉鶚が甲骨文の最初の図録『鉄雲蔵龜』を一九〇三年に出版すると、たちまち反響を呼び、翌一九〇四年には、清末の大学者孫詒讓そんい じょうが甲骨文の最初の研究書として『契文學例』けいぶんきよれいを出版した。彼は『墨子間詁』ぼくし かんご『周礼正義』しゅうらいせいぎなど伝世文献の注釈・研究で知られる一方で、金文の注釈書である『古籀拾遺』こしゅうしゅういを出版するなど、金石学の分野でも有名な学者であった。彼は伝世文献や金文の知見を駆使して甲骨文の読解に取り組んだが、甲骨学は研究の当初から伝世文献と密接に結びついていったことになる。

甲骨そのものを求める動きも活発化した。甲骨の出土地については、『鉄雲蔵龜』の劉鶚による自序では、河南省湯陰県の古牖里城こゆうりじょうとされていた。周の文王が殷の紂王によつて幽閉された羑里ゆうりの故地という伝承の残る地である（なお、湯陰は南宋の武将岳飛がくひの出身地としても知られる）。詳細な出土地については、甲骨の取り引きを担う骨董商らが秘密にしていたこともあり、不明とさ

れていた。学者たちはこうした骨董商を介して甲骨を入手するほかなかったのである。

また、当地では甲骨文を偽作して売りつけるというようなことも盛んに行われていたようである。後章でも触れるように、偽作の流通は出土文献につきまとう問題である（↓114・238ページ）。

甲骨学の当初の課題は、甲骨の出土地を突き止めることと、甲骨文がいつの時代の資料なのかをはっきりさせることであつた。

甲骨文の時代について、当初文字に原始的な象形字が多いことや、甲骨文中に祖乙・祖辛など、『史記』殷本紀いんほんぎに登場する殷王の名と同様の十干じっかんによる人名が見えることなどを根拠として、殷代のもの、あるいはもつと大雑把に周以前の夏・殷の時代のものだろうとされてきた。

日本の中国古代史学者林泰輔はやしたいすけは、一九〇九年に『史学雑誌』第二〇編第八・九・一〇号の三号にわたって「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨にて」という論文を発表し、これらの理由に加え、甲骨文の文章が簡略であること、そして甲骨の発見地とされる河南省湯陰県の古牖里城が、伝世文献上で殷の旧都とされる朝歌ちやうか、すなわち河南省淇県きからそれほど遠くないことを根拠として、「その殷代のものたることは殆ど疑なきものの如し」とし、更に甲骨の性質を「殷代王室に属せし卜人の掌りし遺物なるべし」、すなわち殷王室に仕える卜占の官が使用した遺物

であるとしている。

甲骨発見の年とされる一八九九年から一〇年ほどの間に、甲骨文は日本も含めて海外の学者や好事家からも注目されるようになっていたのである。この論文は日本で初めて発表された甲骨文に関する研究である。林はその後甲骨文の図録として『亀甲獸骨文字』を出版している。付言しておく、甲骨文の発見と前後して一九〇〇年に、敦煌の莫高窟で敦煌文献が発見され、やはり日本も含めた海外の学者の注目を集めている（↓225ページ）。甲骨学と敦煌学はほぼ同時期に歩みを開始したのである。

さて、甲骨文の出土地については、劉鶚の友人であった羅振玉が精力的に探索を進め、河南省湯陰県の古牖里城ではなく、同じ河南省内でも北方に位置する、現在の安陽市に属する小屯村であることを突き止めた。一九一一年には弟の羅振常を現地に派遣し、現地民から甲骨やその他古器物の購入に成功している。

小屯村は洹水（現在は洹河・安陽河と呼ばれる）という川のほとりに位置する。『史記』項羽本紀及び『漢書』項籍伝を参照すると、楚の項羽がこの洹水の南の殷墟（殷墟）で秦の將軍章邯と会見し、盟約を結んだとある。羅振玉は、甲骨の出土地はまさにその殷墟であると考えた。

羅振玉は『殷虛書契前編』『殷虛書契菁華』『殷虛書契後編』といった甲骨文の図録の出版や

その研究で知られ、その弟子の王国維おうこくゐ、更には後述する董作賓とうさくひん・郭沫若かくまつじやくとともに、甲骨学の発展に貢献した四人の偉大な学者「甲骨四堂」のひとつとして数えられている。「四堂」というのは、彼らの号や字にそれぞれ羅雪堂・王観堂わんかんとく・董彦堂とうげんとく・郭鼎堂かくていとくと、「堂」の字がついていることによる呼称である(図1-1)。

羅振玉は、林泰輔や、京都帝国大学教授で、著名な中国学者である内藤湖南ないとうこなんといった日本の学者とも交流があった。その著書『殷商貞卜文字攷』は、自序によると林泰輔の「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就て」に刺激を受けて書かれたものである。

殷王の系譜

甲骨が林泰輔の言うように「殷代王室に属せし卜人の掌りし遺物」であることを証明するには、甲骨文に見える祖乙・祖辛のような十干による呼称が殷王の名であることを論証し、当時の殷王の系譜を復原する必要がある。その課題に取り組んだのが王国維である。

図 1-1 甲骨四堂



羅振玉



王国維



董作賓



郭沫若

彼は一九一七年に「殷卜辞中 所見先公先王考」「殷卜辞中所見先公先王統考」の二編の論文を発表し、『史記』殷本紀など伝世文献に見える殷王やその先公（上甲以前の王室の祖先神。図1-2の系図を参照）と、甲骨文に見える王名や神名とを比較し、殷本紀に伝えられる殷王の系譜がほぼ確実に信頼に足るものであり、これらの文献に見える殷の歴史が決して虚構ではないこと、そして甲骨が確かに殷の王室に関わる遺物であることを示した。

王国維が「殷卜辞中所見先公先王考」を執筆したのは、内藤湖南の論文「王亥」を読んだことがきっかけとなっている。王亥というのは甲骨文に見える殷王の先公のひとりである。内藤湖南は、当時羅振玉とともに辛亥革命の難を避けるため、一時日本の京都に亡命していた王国維と王亥について語り合い、彼から殷本紀に見える「振」や『竹書紀年』に見える「殷侯子亥」、「呂氏春秋」に見える「王氷」がそれぞれ王亥を指しているのではないかという指摘を受けて触発され、この論文を書いたのだと言う。

そして湖南は王国維より「殷卜辞中所見先公先王考」が寄せられると、続編「続王亥」を発表してその概略をまとめ、王国維の研究の成果を日本に紹介した。このように初期の甲骨学は中国と日本の学者とが相互に啓発しあうことによって発展していった。

殷王の系譜研究は王国維の研究を基礎として後進の研究者により更に深められていった。図

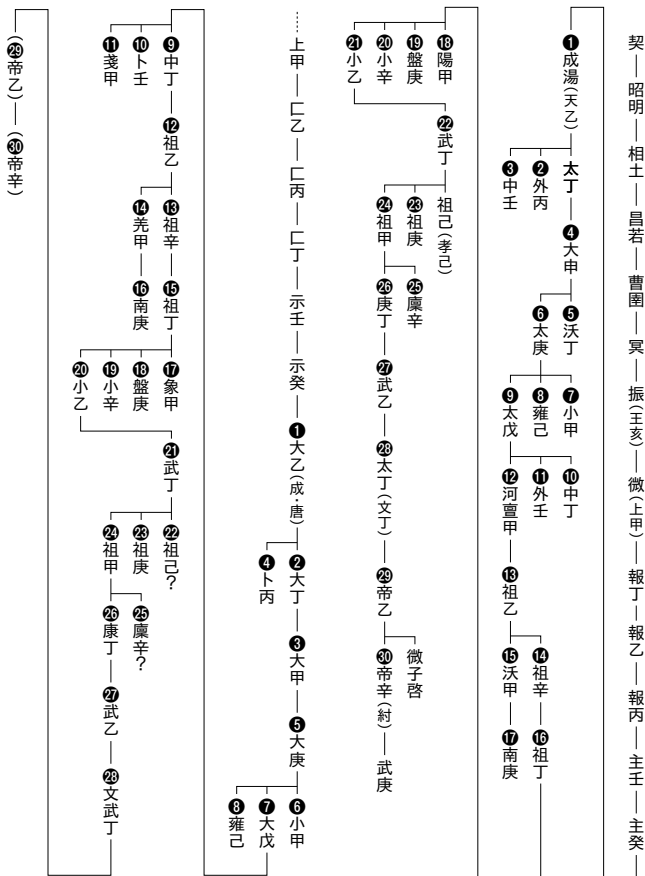
1-2に殷本紀に見える殷王の系譜と、甲骨文より復原された系譜とを挙げておく。甲骨文からの復原については、研究者によって細かな違いがあるが、ここでは一例として白川静の『甲骨文の世界』による復原を一部修正のうえ挙げておいた。

両者を見比べてみると、たとえば中壬・沃丁のように甲骨文の方では該当する名前が見えない王がいたり、逆に初代成湯の子の太丁(大丁)のように殷本紀の方では即位が認められていないが、甲骨文では王として扱われている者がいたり、河亶甲↓棗甲のように殷本紀と甲骨文とで呼称が大きく変わっている王がいたり、太甲(大甲)と外丙(卜丙)のように即位の順が異なる者が存在したりといった具合に、異同があることがわかる。なお廩辛と祖己については、甲骨文での即位の有無をめぐって議論がある。廩辛の場合は少なくとも殷代のある時期には即位していたと見る論者が多い。

殷王朝は帝辛すなわち紂王の時代に滅亡したので、殷墟甲骨文では彼を祖先として記録したものではなく、当然その名前も見られない。その父の帝乙の名も見られないが、こちらは周の甲骨文である周原甲骨や殷末周初の金文に「文武帝乙」としてその名が見られる。

近年は更に落合淳思によって、殷王の系譜は一定不変のものとして後代に受け継がれたわけではなく、時期ごとの政治的要請によって改変がなされ、殷王の実際の血縁関係を反映してい

図 1-2 殷王室系図（丸数字は王位継承の順序を示す）



甲骨文による系図

(上甲以前の先公の部分は省略した)

『史記』殷本紀による系図

(一部をその他の文献によって補った)

契—昭明—相土—昌若—曹圉—冥—振(王亥)—微(上甲)—報丁—報乙—報丙—主壬—主癸

たわけではなかったことなどが指摘されている。

王国維の二重証拠法

話を王国維に戻そう。彼は中国古代史の分野の研究手法として「二重証拠法」(あるいは二重証明法とも)を提起したことで知られる。その概要は、彼が一九二五年に北京の清華学校国学研究院で講義した「古史新証」の講義案の総論にまとめられている(清華学校は中国の名門大学として知られる清華大学の前身にあたる)。

王国維はまず、自分は今日に生まれ、幸いにして「紙上の材料」のほか、更に「地下の新材料」を得ることができたとする。「紙上の材料」とは『尚書』(『書経』)『詩経』『易経』、古帝王の系譜や事績をまとめた『大戴礼記』の五帝徳篇と帝繫篇、そして『春秋』『春秋左氏伝』(『左伝』)『国語』『世本』『竹書紀年』『戦国策』『史記』などの伝世文献を指し、「地下の新材料」とは甲骨文と金文、すなわち出土文献を指す。

そして「地下の新材料」によって「紙上の材料」の内容を補正したり、また古書のある部分の実録であることを証明することができるのであるとし、この二重証拠法は今日になってようやく実行が可能となった、古書の内容で未だ証明を得ていないものも、みだりに否定すること

はできなくなつたのであると述べる。

二重証拠法は一般に伝世文献と出土文献との内容を照らし合わせて研究を進める手法であるとされているが、実際にはここで述べられているように、出土文献によつて伝世文献の内容の真偽を検証するための手法として使われてきた。先に触れた「殷卜辞中所見先公先王考」、同「続考」も、こゝした見地から行われた研究であり、事実「古史新証」では二重証拠法による研究の一例として、この二編の論文の改訂版とも言うべき論考を収めている。

伝世文献と出土文献の立場は対等ではなく、出土文献はあくまで伝世文献の内容を検証するための傍証の材料としての役割しか与えられていないわけである。この問題については、後文でもたびたび触れていくことになるだろう（二重証拠法についてはまた別の観点からの批判もある。↓272ページ）。

信古・疑古・釈古

王国維がこの二重証拠法を提起したのは、当時学术界で流行しつつあった「疑古」の風潮を批判するためであった。

「古史新証」では、古代に関する伝承を記載した文献は、真偽を判別せずにも何でも信じて史書

に取り入れるという「信古の過ち」について述べるとともに、五帝に数えられる堯・舜や、夏王朝の始祖とされる禹の实在を疑うような疑古の風潮は、その懐疑の態度や批評の精神においては取るべきものがないではないが、惜しむらくは古史の材料に対して、十分な処理を行っていないと、「疑古の過ち」について述べている。

疑古というのは、伝世文献が伝える古代の伝承の史実性を疑うなど、伝世文献に対して懐疑的・批判的な態度で臨む学風であり、清末の著名な学者・政治家である康有為が『新学偽経考』『孔子改制考』で展開した、『春秋左氏伝』（『左伝』）や『周礼』は、前漢末に王莽による改革や篡奪を正当化するために、そのブレイクである劉歆が偽作したものであるとか、『易経』『尚書』『詩経』『礼記』『春秋』『樂経』の六経は、孔子が自らの改制を正当化するために、自己の理想を堯・舜や周の文王といった古の聖人に託して創作したものであるといった学説に影響されて形成されたものである。一九一〇年代の後半には、儒教批判を唱える新文化運動とも連動する形で疑古の動きが強まった。

「疑古派」の主要な人物として有名なのは、文学者・思想家の胡適、その教え子で古代史家の顧頡剛、その盟友の錢玄同（彼は自らの学問的な決意を示すため疑古玄同と改名した）などである。彼らの議論は主に顧頡剛らが編者をつとめた雑誌『古史辨』で展開されたので、「疑古派」のことを

「古史辨派」とも呼ぶ（なお彼らのいう「古史」とは、東周の頃までの歴史を指す）。

このうち胡適は「東周以上に史無し」、すなわち伝世文献に見える東周以前の歴史には信頼に足るものはひとつとして存在しないという議論を展開した。

顧頡剛は「層累地造成古史觀」（累層的に造成された古史觀）と呼ばれる考え方を提示したことで知られる。すなわち、禹の伝承は西周期には既に存在していたが、それより以前の帝王とされる堯・舜の伝承は、春秋末期の孔子の時代に至ってはじめて登場し、後になると更にその前の時代の帝王として伏羲や神農ふっき しんのうの伝承が語られるようになるという具合に、時代が新しくなるにつれて、より古い時代のもとのとされる伝承が積み重ねられていくという考え方である。

日本では、江戸時代、一八世紀前半の学者である富永仲基とみながなかもともそれに先立って同様のことを主張しており、こちらは加上説かじょうせつと呼ばれる。彼の学説は内藤湖南によって見出され、評価された。

そして近代に入ると、東京帝国大学教授であった白鳥庫吉しらとりくらきちは、一九〇九年以降「支那古伝説の研究」など一連の講演・論文によって、堯・舜・禹は古代の中国人の道德的理想を人格化した存在であって、歴史上実在した人物であるとは認められないという「堯舜禹抹殺論」を主張し、日本や中国で大きな反響を呼び起こしていた。これに対して日本では前述の林泰輔らが反論を行っている。

王国維の研究姿勢は、十分な検証を行わずにひたすら伝世文献を疑うだけの疑古でもなく、また伝世文献を妄信するだけの信古でもないということで、第三の道「釈古」であると位置づけられ、後世の出土文献を中心に扱う研究者は、王国維を始祖として自らを「釈古派」と位置づけることが多い（「釈古の観点からの疑古批判については↓78・233ページ」）。

その「釈古派」の始祖たる王国維であるが、「古史新証」を発表した二年後の一九二七年に、西太后の離宮として知られる北京の頤和園の昆明湖に身投げし、自ら命を絶った。自殺の理由は、かねて清朝の遺臣を自認していたので、清室の先行きを憂えて殉節したのであるとか、師の羅振玉との間でトラブルを抱えていたからであるとか諸説あるが、はっきりとした理由はわからないままとなっている。殷墟の発掘が開始されたのはその翌年のことであった。

殷墟発掘

殷墟の発掘は、一九二八年に組織されたばかりの国立アカデミー中央研究院歴史語言研究所の考古組によって進められることになった。主眼は、発掘調査を中国人自身の手で進めることにあった。

従来中国での発掘調査は、スウェーデンのアンダーソンによる河南省での仰韶遺跡の発掘や、

濱田耕作・鳥居龍蔵とりいりゅうぞうら日本人考古学者による中国東北部での調査、そしてイギリスのスタインやスウェーデンのヘーデンによる西北部での調査と木簡の発見など、日本人を含む外国人によって進められていた。これが中国人のナシヨナリズムを刺激していたのである（↓224ページ）。また、一九二〇年代になるとハーバード大学で考古学の手法を学んだ李済りさいが帰国するなど、中国人の手で発掘を行うことが可能な条件が整いつつあった。

殷墟発掘は、一九二六年の山西省夏県西陰村遺跡の発掘に次ぐ二度目の中国人自身による発掘調査であり、一九二八年から、一九三七年に日中戦争の勃発によって発掘が中断されるまで、一五次にわたって行われた。

第一次発掘は後に「甲骨四堂」のひとりとして知られるようになる董作賓が担ったが、第二次発掘以降は考古組主任となった李済が調査に加わり、この後もやはりハーバード大学で考古学を学んだ梁思永りょうしえい（清末民国期の学者・ジャーナリストとして著名な梁啓超りょうけいすうの次男である）や郭宝鈞かくほうこん・石璋如しやうじょ・夏鼐かたい・胡厚宣ここうせんら新しいスタッフが順次加わっている。

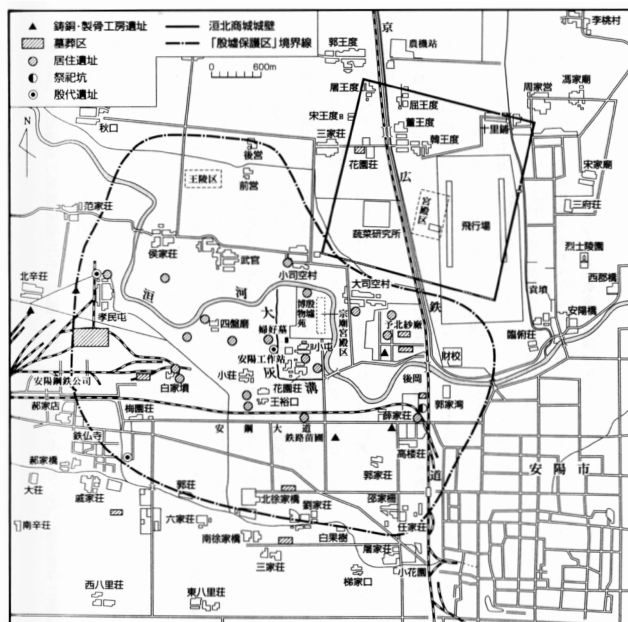
発掘は安陽の洹河南岸に位置する小屯村や、そこから洹水を挟んで北側に位置する侯家莊こうかそうの西北崗せいほくこうなどで行われた（以下、殷墟の遺跡の配置については図1-3を参照）。

小屯村北側では、東西二〇〇メートル、南北三五〇メートルの範囲から、甲・乙・丙の三組

に区分される計五三基の建築基壇が発見された。甲・乙・丙の三組の建築基壇は北から南へと並んでいるが、特に中央部に位置する乙組建築基壇と南側の丙組建築基壇の付近からは、祭祀を行う際に犠牲に用いられたと見られる動物の骨や人骨、車馬が埋められた祭祀坑さいしこうが多く発見されており、この小屯村北側一帯は、殷王の宮殿や祖先を祀った宗廟そうびょうの跡地にあたる宮殿宗廟区であるとされている。

宮殿宗廟区からはおびただしい数の甲骨が発見され、ようやく盗掘品の購入ではなく、考古学的な調査によって甲骨が得られることになった。特に重要な意味を持つのが、第三次発掘で得られた「大亀四版」と

図 1-3 殷墟周辺地図

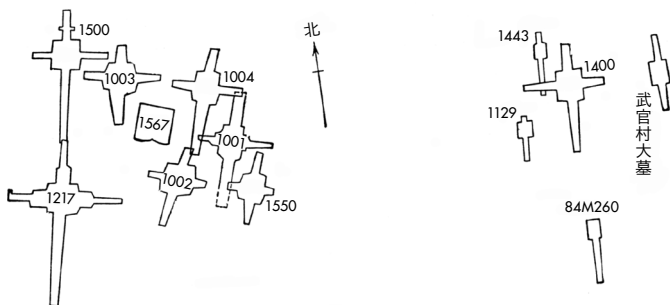


呼ばれる、破損のない完全な状態で出土した四枚の亀甲と、第一三次発掘でYH一二七という坑穴から発見された一万七〇九六片もの甲骨群である。後者は、一五次にわたる殷墟発掘で得られた甲骨総計およそ二万五〇〇〇片のうち三分の二近くを占める。

侯家莊西北崗では、殷王のものと見られる大型墓が複数発見されており、西北崗は王陵区とされている。王陵区は東西二区に分けられ、西区には四方に墓道を具え、上から見ると「亜」の字の旧字の「亞」の形に似た「亜字形墓」と呼ばれる形式の大型墓が七基と、未完成のまま放置されたと見られる大型墓が一基ある。未使用墓とされる一五六七号墓は、最後の王である帝辛のために用意されていたものであるとも言われる。東区には、亜字形の大型墓一基、墓道を南北二方向に具えた「中字形」の大型墓が二基、墓道が南方一方向のみの「甲字形墓」が一基発見された。東区ではまた戦後に中字形大型墓である武官村大墓^{ぶくわんそんたいぼ}が発見されている(図1-4・1-5を参照)。

ただ、これらの墓は既に盗掘されており、どれが誰の墓であるの

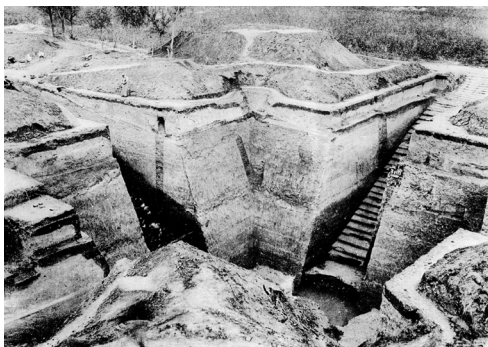
図1-4 殷墟王陵区平面図



か判断するすべはない。王陵と言われているのも、墓の規模からそう判断されているものである。そして王陵区でも、動物の骨や車馬、人骨を埋めた祭祀坑が発見されている。人骨は殉葬者の骨と見られ、王墓の周辺のほか、墓道など墓葬内からも発見されている。また王墓の墓底には犬や武器を持った兵士を一体ずつ埋めた腰坑ようこうが存在する。この腰坑とおびただしい殉葬の存在が殷墓の特徴とされる（殉葬者の身分については↓53ページ）。

殷墟の年代については、殷の後期、一般的には盤庚以降の時期にあたとされる。宮殿宗廟区は盤庚以降の都、王陵区は盤庚から最後の紂王に至るまでの墓葬ということになる。これは『尚書』盤庚上の冒頭に「盤庚 殷に遷る」とあり、また『史記』殷本紀ちゅうてい中丁ちゅうていの時代から盤庚に至るまで五度遷都したとある一方で、『竹書紀年』に「盤庚の殷に徙りて自り、紂の滅ぶに至るまで、七百七十三年（二百七十三年の誤りか）、更に都を徙さず」という記載があることによるものである（『竹書紀年』については↓157ページ）。これらの文献にいう「殷」とは地名を指す。

図 1-5 殷墟一五〇〇号墓発掘時の写真



ただ、殷墟で発見された甲骨文が武丁以後の時代のものであることから、殷墟も武丁以後の都ではないかと疑う意見もあり、特に後述の洹北商城^{えんほくしやうじやう}が発見されてからは武丁以後の都とする見解が強まりつつある（↓59ページ）。

こうした殷墟の発掘によって、殷王朝の实在が考古学的にも証明されることとなった。出土文献である甲骨文と発掘の成果との両面で「東周以上にも史がある」ことが示された。その反面殷墟発掘の成功は、濱田耕作が危惧したように、中国において考古学による発掘の成果が文献の奴隷や脚注となる道を切り開くことにもなった。

甲骨文とは

ここで殷墟より得られた甲骨文がどのような資料なのかを具
体例を挙げつつ見ておこう。甲骨文、とりわけ卜占の内容を記
録した卜辞^{ぼくじ}は、甲骨を焼いて卜占が行われた後に、その記録と
して刻まれたとされており、卜占が行われた日付と、卜占の担
当者である貞人^{ていじん}の名前を記す前辞^{ぜんじ}（あるいは叙辞^{じょじ}とも呼ばれる）、卜
占の内容、すなわち何を占ったのかを記す命辞^{めいじ}、甲骨を焼いて

図1-6 甲骨文拓本（合集六〇七五正）



ひび割れの形からどのような予兆を読み取ったか、吉凶の判断を記した占辞（あるいは繇辞とも）、卜占が的中したかどうか結果を記した驗辞の四つの部分に分けられる。

以下に例として合集六〇五七正の卜辞を引き、この四つに分けてみる（図1-6の点線で囲った部分。この図には全部で四条の甲骨文が刻まれている。ここで読むのはそのうちの一条である）。

《前 辞》癸巳卜す、穀貞う、

（癸巳の日に卜占を行う、穀が問う、）

《命 辞》「旬に困亡きか」と。

（「この十日の間に悪いことがおこらないだろうか。」）

《占 辞》王固て曰く、「崇り有り、其れ来艱有らん」と。

（王が卜兆を見て言うには、「崇りがある、災いがやってくるだろう。」）

《驗 辞》五日丁酉に迄至り、允に来「艱」有りて、西「自りす」。沚𠄎告げて曰く、「土方我が東鄙を征し、二邑を伐せり。吾方も亦た我が西鄙の田を侵せり」と。

（五日後の丁酉の日に、本当に西から災いがやってきた。（臣下の）沚𠄎が報告して言うには、「（敵

国の）土方が我が（殷の）東辺の土地に攻めこみ、二つの邑を破壊しました。（敵国の）吾方もやは

り我が（殷の）西辺の田地に侵入しました。」

この甲骨文の大意は、この十日の間の吉凶を占うという定例の卜占を行ったところ、王によって凶兆が読み取られ、果たして予測通りに土方や土方といった敵対する勢力が攻めこんできたという内容である。

前辞の部分に出てくる「殻」というのが貞人の名前である。この部分の「貞う」の上の文字が何を示すのか長らく謎とされてきたが、前述の殷墟宮殿宗廟区で発掘された「大亀四版」をもとに董作賓が研究を進め、貞人の名前であることが確定された。

命辞は占いたい内容を神靈に問い掛け、それによって殷王などが未来の行動を決定していたとするのが一般的な考え方であり、本書もこの考え方に沿うことにするが、一方で欧米の研究者を中心に本当にそう考えてもよいのかという疑問が提示されている。これについては第4章で後の時代の占いの記録を見る際に触れることにしたい（↓246ページ）。

ここで挙げたものは甲骨文としては長文のものである。実のところ前辞・命辞・占辞・驗辞の四つが完備された例はごく少数で、占辞や驗辞を欠いた短文のものの方が圧倒的に多い。

卜辞は殷王が卜占の主体となる「王卜辞」と、王族・貴族が主体となる「非王卜辞」に分け

られる。一九九一年に殷墟内で発見された「花園莊東地甲骨」も「非王卜辞」に属する。

少数ながら卜占に関わるもの以外の刻辞も存在し、卜占に必要な資材の入貢を甲骨の特定の部位に記録した記事刻辞、特定の事件を記念して鹿・虎といった動物や人の頭骨などに刻まれたもの、日付の排列を記録した干支表、特定の一族の系譜を記録した家譜刻辞、練習用に刻まれ、実際の卜占には用いられない習刻などがある。

これら殷墟甲骨文は、殷の武丁から最後の帝辛の時代にかけて作られたとされる。甲骨の材質については、亀の甲羅と牛の肩甲骨を使用したものが多く、かつもともとは一件の甲羅や骨であったのが、複数件に割れてしまったものが多い。

甲骨文の五期区分

董作賓は殷墟発掘で得られた「大亀四版」の研究を通じて、甲骨文から貞人の存在を見出すとともに、そのグループピングが可能なることに気付いた。

「大亀四版」にはそれぞれ短文の甲骨文が複数刻まれており、たとえば第四版に刻まれた甲骨文には争・允・古など六名の貞人の名が見えるが、それぞれの文が刻まれたのはだいたい同時期だと考えられるので、この六名は同時期の貞人ということになる。また第一版に見える貞人

には古とともに賓^{ひん}という人物がいるので、賓も彼らとだいたい同時期の人物ということになる。この甲骨の同版関係による貞人のグループピングが甲骨文の時代区分に利用できるのではないかという着想を得たのである。

こうした観点から甲骨文の時代区分についてまとめた論文が、一九三二年に発表の「甲骨文断代研究例」である。この論文では貞人に加えて世系（殷王の系譜）・称谓（殷王などの呼称の変化）・坑位（甲骨が出土した場所）・方国（甲骨文に現れる国名）・人物・事類（殷王の田獵など甲骨文の内容）・文法・字形・書体の計一〇項目からなる指標を設け、甲骨文を以下の五期に区分している。

第一期 武丁（及びそれ以前の盤庚・小辛・小乙）

第二期 祖庚・祖甲

第三期 廩辛・康丁

第四期 武乙・文丁

第五期 帝乙・帝辛

前述のように、現在一般に甲骨文は武丁の時代以後に作られたとされているが、董作賓は殷

墟に遷都したのは盤庚であるという観点から、盤庚・小辛・小乙の時代のものも含まれているはずだと考えたのである。

一〇件の指標の中で、「字形」と「書体」という似たような項目が並んでいる。字形とは、たとえば「王」の字が $\text{王} \rightarrow \text{王} \rightarrow \text{王}$ と変化していくといったような、個別の字形の字画・構造上の特徴を指し、書体の方は、文字の大きさや線の太さなどによって示される書風を指す。

董作賓は、各期の書体の特徴を、第一期は雄偉、第二期は謹飭、第三期は頽靡、第四期は勁峭、第五期は嚴整という言葉でまとめている。第一期は雄渾な書体であったのが、第二期は謹直、第三期は柔弱で弛緩の見られる書体となり、第四期は第一期の雄渾さを取り戻し、第五期は謹嚴精密な書体になるということである。特に第四期において、書体だけでなく個別の字形の面でも、たとえば「王」の字で第一期に用いられていた「 王 」の形が一時的に復活するといったような、第一期への復古現象が見られることに注意している。

以後、長らくこの董作賓の五期区分が甲骨文の標準的な区分として採用されることになり、時代区分の研究もこれを基礎として議論が重ねられていくことになる（↓60ページ）。

日本での懐疑論

ここで甲骨文と殷墟に対する、日本での否定的な反応について触れておきたい。前述したように、林泰輔、あるいは内藤湖南ら京都帝国大学の学者たちは、殷墟発掘以前の早い段階から甲骨文に関心を示し、羅振玉や王国維といった中国の学者と交流していた。

これに対し、「堯舜禹抹殺論」を展開した白鳥庫吉ら東京帝国大学の学者たちは、甲骨文は必ずしも古いものとは言えないのではないのかと疑いの目を向け、殷墟の発掘に対しても、小屯村の付近が殷墟であるかどうかは文献上確固たる証拠があるわけではない、怪しむべき所が多いと、冷やかな態度を示していた。

しかしこのような東京帝大での懐疑論にも終止符が打たれることになる。そのきっかけとなったのは、京都帝大出身で東方文化研究所（現在の京都大学人文科学研究所の前身）所属の甲骨・金文学者小川茂樹（後の貝塚茂樹。湯川秀樹の次兄にあたる）が、一九四三年に東京帝大文学部で行った講演である。講演の内容は甲骨文による殷代の歴史についてであったということだが、東京帝大の中国史学者和田清がこの講演を聞き、「これで甲骨文が殷代の遺物であることを認めないわけにはいかなかった」と感想を漏らしたという（以上、吉開将人の研究に拠る）。

ただ、これで甲骨文と殷墟に対する懐疑論が消滅したわけではなく、かつ京都帝大の学者た

ちがみな甲骨文や殷墟に対して肯定的だったわけではない。貝塚茂樹と同じく京都帝大出身で、京都帝大及び戦後の京都大学で教鞭を執った東洋史学者の宮崎市定みやざきいちじだが、一九七七年に出版した『中国史』の上巻の中で懷疑論を展開している。これについて見ておこう。

宮崎市定は、まず甲骨文について二点の疑念を挙げる。ひとつは、甲骨文字の学習や練習のために用いられたものが相当数混じっているのではないか、これらと本番の卜占に用いられた甲骨とをどう区別するのかということである。

もうひとつは、卜占に亀甲を用いる風習は殷代以後も漢初まで継続している。卜占は一家の秘伝として伝えられたに違いないから、甲骨文字の形式はそのまま傳承されてあまり変化は起こらなかったであろう。その後代のものが出土した時に、これを殷代のものとのようにして区別をするのかという疑念である。

ひとつめの疑念については、前述のように甲骨文では練習用に用いられた習刻と呼ばれるものが見つかっており、本番の卜占に用いられたものとかかなりの程度弁別が可能である。

ふたつめの疑念については、やはり前述したように、董作賓の時代区分研究や、その後の研究の積み重ねによって、殷墟甲骨文については殷の武丁から最後の帝乙・帝辛の時代までのものであることが明らかとなっており、字形・書体の面でも変化があつて同じ形式のまま受け継

がれたのではないということが、その反論となる。更に殷の甲骨文とは別に周原しゅうげん甲骨文や周公廟こうびょう甲骨文といった周の甲骨文が発見されており、殷墟甲骨文の書式を継承しつつも、異なる部分がある。

宮崎市定はまた、甲骨文字の中にはそれほど原始的でない形のもが含まれているように思われ、文句の内容も後代の思想と思われるものが混じっているように感じられるとするが、何を基準にそのようなことを言っているのかよくわからない。甲骨文字の字形は西周以後の金文や、竹簡などの戦国文字と対比すると、やはり原始的なものと位置づけられる。

宮崎市定の甲骨文に対する疑念は、『中国史』が刊行された一九七七年当時の甲骨学の水準で、おおむね反論が可能であると思う。

彼は殷墟についても疑念を提示している。殷王朝の滅亡後、殷都の跡地に周の諸侯国である衛えいが都を建てたとされる。発掘調査を行えば、衛の都城の下に殷の都城が重なって出てくるはずであり、かつまた侯家莊西北崗の王陵区では、殷王の墓とともに衛侯の墓も発見されてしかるべきであるというのである。

これは『史記』衛康叔えいこうしゆくせい世家に見える、衛の都が黄河と淇水きすいという川の間「商墟しやうきよ」に置かれたという記述をふまえた発想なのであろう。西周の衛国の墓地については、一九三〇年代に既

に衛都の朝歌があつた河南省淇県とほど近い同省浚 県辛村で発掘されているが、その周辺から殷王に関する遺跡が発見されたという報告は現在のところない。衛の都が殷の都の跡地に置かれたはずであるというのは、いささか文献の記述に引きずられすぎているのではないだろうか（二方で前述のように、同じ『史記』の項羽本紀には、洹水の南に殷墟があつたという記述もあるわけだが……）。

更に宮崎市定は、殷墟から城壁が発見されていないのを不審としたのか、殷墟は殷代の墓地ではあるが、都城の遺跡とは認めがたいとしている。しかし殷墟宮殿区周辺では城壁に代わるものとして濠の跡が発見されており、それに加えて洹河も濠の役割を果たしていたと見られている（図1-3を参照。地図中の「大灰溝」が濠の跡とされる）。近年は都城の条件として城壁は必ずしも必要ではなく、その有無のみをもつて殷墟が都城であつたか否かは判断できないという論調になっている。

奴隸制をめぐる議論

殷墟の発掘物で目を引いたのは、甲骨や青銅器（殷周時代を通じて最大の鼎とされる司母戊鼎などが殷墟で発掘されている）のほか、膨大な数にのぼる人骨である。先述のように祭祀の犠牲にされたり、王などの死にともなつて殉死させられた者の遺体であると見られるが、頭部と胴体が切り離さ

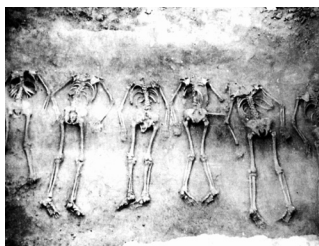
れて別々に埋められるなど、残虐な扱われ方をしている(図1-7)。彼らは殷代に奴隸が存在したことを示すものであると考えられた。

また、甲骨文中にも奴隸の存在を示すものがあり、殷墟発掘の頃から殷周時代の奴隸制をめぐる議論がさかんに行われるようになった。ここで奴隸制と言っているのは、マルクス主義の観点からの唯物史観(ゆいぶつしかん)にもとづき、中国の殷周時代も古代ギリシア・ローマと同様に、奴隸が農業など生産労働の主要な担い手であった奴隸制の時代であり、中国にも西欧と同様に中世の封建制社会に先立って古代奴隸制社会が存在したという議論である。

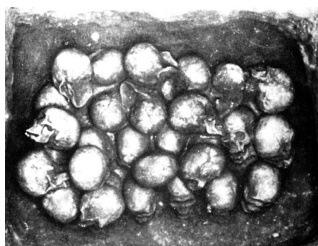
一九一〇年代半ば以後の新文化運動の頃から社会主義思想、特にマルクス主義が中国でも知識人を中心に知られるようになり、中国共産党も一九二一年に既に結成されていた。

奴隸制をめぐる議論をリードしたのは、「甲骨四堂」の最後のひとり郭沫若である。彼は一般に文学者・政治家として知られるが、中国古代史学や甲骨・金文学の分野でも大きな足跡を残している。彼は一九三〇年

図 1-7 殷墟王陵区出土人骨



殷墟王陵区一〇〇一号墓南墓道無頭肢体



殷墟王陵区祭祀坑人頭

に『中国古代社会研究』、一九四五年に『十批判書』、中華人民共和国成立後の一九五二年に『奴隶制時代』を発表し、一連の議論を展開している。

すなわち、甲骨文や西周金文には「衆」あるいは「衆人」と呼ばれる人々が農作業に従事させられたことを示す記述がある。「衆」とは太陽のもとで多数の人間が労働に従事するさまをかたどった文字であり、彼らの身分は奴隶である(図1-8)。また甲骨文には、殷王の祖先などに対する祭祀を執り行う際に、牛や羊などの動物と同様に人間を犠牲として用いたことを記すものが多数あるが、彼らも王や貴族の奴隶であり、その実物の証拠が殷墟で発掘された人骨や殉葬者の骨である。こうした議論によって殷周時代が奴隶制の時代であったことを論証しようとしたのである。

郭沫若の奴隶制社会論は多くの学者の賛同を得る一方で、特に「衆」の身分に対して、甲骨文やその他の文献に見える用例から、彼らは奴隶などではなく自由民あるいは平民、更には統治階級に属する「奴隶主」(唯物史観に基づく用語)ではないかといった反論が寄せられた。

特に胡厚宣は一九四四年に発表した「殷代非奴隶社会論」によって、「衆」は奴隶ではなく自由な公民であったとする一方で、これとは別に祭祀の犠牲や殉葬者として奴隶は確かに存在したが、彼らは生産労働の主要な担い手であったとは言えず、殷代は奴隶制の社会ではなかった

という見方を提示している。

この奴隸制をめぐる議論には、文字学者として著名な白川静など日本の研究者も参加している。白川静は殷墟で発見された人骨について、甲骨文には羌人^{きやうじん}や南人^{なんじん}といった種族が祭祀の犠牲として用いられる事例が多数見え、その遺体であろうとする。そして彼らは人牲として用いるために捕獲された人々であり、農業生産奴隸とは別な存在であるとする。

「衆」については、甲骨文の用例から、農耕や戦争といった国家的な活動のために、随時各地の諸族から王のもとへと招集されていた集団を指し、かなり大切な取り扱いをされており、奴隸的な身分ではないとする。その字形も四角形の邑の城郭のもとに人々が跪^{ひざまず}くさまをかたどったものであり、太陽のもとで労働するさまではないと郭沫若説を否定したのである。

ただ、奴隸制が存在したとする側もそれを否定する側も、自らの政治的信条に沿って史料を讀解した面は否めず、特に甲骨文字の「衆」の字形の解釈についてはその傾向が強い。その文字が

図 1-8 甲骨文の「衆」字



何をかたどっているのかで判断する字源説が主観的なものであることを示す事例になるだろう。

また読者に誤解しないで頂きたいのは、奴隸制を否定する論者も、殷周時代に奴隸が一定数存在したことは決して否定していない点である。これはあくまで奴隸が農業など生産労働の主要な担い手であったか否かをめぐる議論である（後の時代の漢初の奴婢^{わいび}については↓256ページ）。

そして現在では中国でも、殷周時代に奴隸が存在したことから、奴隸制の社会が存在したことは分けて考えるべき問題であり、当時奴隸が存在したことは間違いないだろうが、彼らが主要な生産労働者であった証拠、すなわち奴隸制の社会が存在した証拠は見出せていないとされている。甲骨文の「衆」についても自由民であるとする意見が主流になっているようである。中国・吉林^{きつりん}大学考古系（考古学科）の大学院生用の教科書である『夏商周考古学』の緒論（序論）に「奴隸制の問題に関して」という項目があり、そういった内容がまとめられている。

実のところ奴隸制をめぐる議論は近年の中国では低調である。「衆」に関する議論の盛り上がりも一時の徒花^{あだばな}であった感がある。アメリカの考古学者ファルケンハウゼンが指摘するように、中国の学術に対するマルクス主義の影響は決して小さくなかったものの、ナシヨナリズムに比べると二次的なものにすぎなかったということになるだろうか。

軍隊を率いた王妃

日中戦争終結後、国共内戦を経て大陸では中華人民共和国が成立し、中華民国政府は台湾に遷ることとなった。殷墟発掘や甲骨学研究を担った学者たちも中国と台湾にわかれ、梁思永・郭宝鈞・夏鼐・胡厚宣や郭沫若らが大陸に残る一方で、董作賓・李济・石璋如らは中央研究院歴史語言研究所の組織と、多数の甲骨を含めた殷墟発掘に関する資料ごと台湾に移った。侯家莊西北崗の王墓に関する発掘報告も、台湾で順次出版されることになる。

大陸では新たな国立アカデミーとして中国科学院が組織され、その中に歴史研究所と考古研究所が設立される（後に中国科学院から分離した中国社会科学院に移管）。この二つの機関が古代史と考古学研究の中心となっていく。

新中国成立後の新たな発見をいくつか挙げると、一九五〇年代には殷代後期に属する殷墟に対し、河南省鄭州市の市街地で殷代前期の鄭州商城の発掘が開始され、全周六九六〇メートルに及ぶ版築による当時の城壁のほか、王宮跡と見られる建築基壇や、青銅器・土器・骨器の工房跡などが発見されている。鄭州市の範囲からは、更に一九八九年に小双橋遺跡が発見され、殷王中丁の都の隄に比定されている。一九八三年には鄭州商城と並ぶ殷の初期の都城として、現在の河南省偃師市の範囲内で偃師商城が発見された。この鄭州商城と偃師商城の性質につい

ては、次節で触れることにしたい（↓70ページ）。

安陽の殷墟近辺でも大きな発見があり、一九九九年に宮殿宗廟区から洹河を挟んで東北寄りに、外郭城壁や宮城・宮殿跡などから成る洹北商城が発見された。殷墟よりも早い時期の都で、具体的には盤庚が遷都した所にあたるとする説が有力である。その後小辛・小乙を経て武丁の時代に火事などの原因で廃棄され（宮殿区一号基壇の地層より焼土塊が確認されているという）、目と鼻の先の殷墟に遷ったのではないかと考えられている。これにより、殷墟を盤庚以後の王都とする従来の見方に修正が迫られることとなった。

殷墟の性質についてもこの洹北商城との関係でとらえられるようになってきており、殷墟が洹河の沿岸に立地するのは、洹北商城が火災に見舞われたことを背景に防火を重視したからではないかという議論もある。

話題性という点では、文化大革命が終わる一九七六年に発掘された殷墟婦好墓ははずせない。小屯村の西北で未盗掘の大型墓である小屯五号墓が発見され、副葬品として大量の青銅器や玉器が出土したが、その青銅器の銘文に「婦好」や「司母辛」という称谓が見られたことから、この婦好が被葬者であると推定されたのである。「司母辛」というのは婦好の没後の呼称であるとされる。

婦好は伝世文献には該当する人物が見当たらず、甲骨文の中に武丁の王妃のひとりとしてその名が見える。彼女は王室の祭祀や庶務に従事しているほか、

辛巳^{しんし}卜す、争貞^{そう}う、「今者^{いま}王人^まを共^しし、婦好^{ふこう}を呼^よびて土方^{ちほう}を伐^うたしむるに、有祐^{いう}を受けんか」と。五月。(合集六四二二)

(辛巳の日に卜占を行い、争が問う、「今王が人を集め、婦好に命じて土方を征伐させれば、(神霊の)加護を受けるだろうか。五月。)

のように、戦争に従事していることを示す事例が多く見え、「軍隊を率いた王妃」として知られるようになった。出土文献の中にか名前が見えない人物が個性をもって語られる珍しいケースである(図1-9)。

歴組^{れきそ}卜辞^{ぼくじ}と分組^{ぶんそ}分類^{ぶんるい}

婦好墓の発見は、甲骨文の時代区分をめぐる議論に対しても大きな影響を与えた。甲骨文中

図 1-9 殷墟宮殿宗廟区の婦好像 (著者撮影)



婦好の名は、董作賓の五期区分でいう第一期（武丁期）に属する賓組卜辞と、第四期（武乙・文丁期）に属する歴組卜辞の両方に見え、以前から不審とされていた。

この賓組や歴組というのは、貞人組と呼ばれる区分法である。これは前述したような甲骨の同版関係を利用したグルーピング（↓47ページ）によって区分したものであり、賓や歴といった各グループの主要な貞人の名を冠したものである。董作賓の五期区分以後も甲骨文の時代区分の研究が継続されていたのである。

董作賓の五期区分のうち、疑問の的となったのは、第一期と類似した字形や書体を持つ第四期の甲骨文であったが、貝塚茂樹や陳夢家の研究により、それまで第四期に区分されていた王卜辞の自組卜辞と、非王卜辞の子組・午組卜辞とが、実は第一期に属するのではないかという見解が有力となった。そして婦好墓の発見により、第四期であるとされていた歴組卜辞の区分にも疑問が強まったというわけである。

李学勤は婦好の名前が見える歴組卜辞を第四期から外し、第一期と第二期の間、すなわち武丁の治世の後期から次の祖庚の時代の間に置くべきであると主張し、賛否両論を巻き起こした。李学勤は文革終了後の頃から現在に至るまで古文字・出土文献学の分野の議論をリードしている大物研究者である。本書ではこの後も何回か登場することになるので、その名を覚えてお

てもらいたい。

また、一九七三年に殷墟の小屯南地で発掘された「小屯南地甲骨文」と呼ばれる甲骨文の大半が第三期・第四期に属し、研究の材料が増えたことも議論を後押しした。

歴組卜辞をめぐる論争により、五期区分にかわる新たな分類の枠組みを作り上げる機運が高まっていた。また分類研究の進展により、貞人と甲骨文の契刻者（刻み手）は別人ではないのか、貞人組の交替と甲骨文の字体（ここでは新字体・旧字体などの違いを示す語ではなく、字形・書体をあわせた呼称である）の変化とは必ずしも一致しないのではないかということが注意されるようになった。

こうした問題を解決するために、字体の特徴を基本として甲骨文を分類しなおすという試みが進められることになった。その新たな分類の枠組みを提示した代表的な研究の成果のひとつが、黄天樹の『殷墟王卜辞的分类与断代』である。字体の特徴によって分類するとはいつても、貞人組による分組を基礎として字体の分類を進めており、貞人組による分組と字体による分類を組み合わせたものということ、こうした分類法を「分組分類」と呼んでいる。

黄天樹による分類では、賓組の甲骨文を賓組一類・典賓類（典型賓組類の略。賓組二類とも）など複数の字類に分割する一方で、賓組三類と出組一類は、貞人組は異なるが字体の上では同類であり、賓組と出組の間で貞人は世代交替したが、甲骨文の契刻者の交替はもう少し後のことだ

ったのだらうということ、この二つを統括して「賓出類」という字類を設けている。

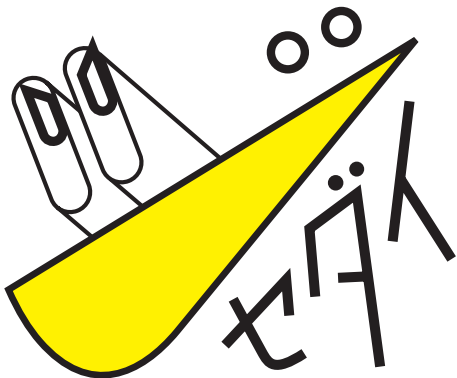
黄天樹と前後して発表された李学勤・彭裕商の『殷墟甲骨分期研究』も、分組分類研究ではよく参照される。こちらは字体の分類より貞人組の分組をやや重視している（二人の共著となっているが、核となっているのは彭裕商の研究である）。

歴組卜辞については、双方とも武丁の後期から祖庚期の間位置づけている（図1-10）。現在は両者の研究を基礎としつつ、更に断代の細密化が進められている。

それとともに、分組分類による区分を基礎として、バラバラの破片になってしまった甲骨をつなぎ合わせて元の形に復原する甲骨の「綴合」と呼ばれる作業も活発に行われている。二つの破片がもともとひとつの甲骨文を成していたのならば、双方の字体は同じはずであり、綴合を正確に行うには字体に関する知識は不可欠というわけである。

現在の甲骨文の研究の中心となっているのは、この甲骨文の分類と綴合である。これらほどもに甲骨文の整理作業ということになり、歴史学そのものというよりは史料学・文献学的な研究という位置づけとなる。しかしこの整理作業が充分でなければ、甲骨文を殷代史の史料として有効に扱えないという問題意識のもとで、こうした作業が研究の中心となっているのである。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!